

岩手食文化研究会便り

発行日 二〇一二年 十月十七日

編纂者 宮本 義孝 第二二号

絵本「どんぐりみーつけた」に想うこと

澄川嘉彦さんが、「どんぐりみーつけた」という可愛い絵本を出されました(月刊予約絵本「ちいさなかがくのとも」福音館)。

ぼくのいえは もりのなか。あきには いっぱい どんぐりが ひろえるんだよ。

「ほらっ、ぴかぴかの どんぐり みつけた」

そして、それを入れておく容器までがしていると、玩具箱

や、押入にしまってたあった冬の蒲団の中からも、誰が入れたのか分からないどんぐりが出てきます。

「どんぐり、だれが おいていったんだろう？」

ぼくとお兄ちゃんとお母さんは、考えます。

そしてそれは、「森に住む誰かだ」と思い至ります。

次の日、森に雪が降りまし

た。ぼくは、お兄ちゃんとお

母さんと一緒に、大事に取っ

ておいたどんぐりを、どんぐ

りの好きなお森の誰かさんに届

けようと持って行って置いて

くる。そういうお話です。

「ご本人によれば、タイムグラフでの澄川さんご一家の生活の

中から生まれたお話だそうです。

けれどまた、人のやさしさ、暖かさを、そつと差し出した

ようなこのお話は、自分が本当に創りたい映画のためにNH

Kを辞めた澄川さんの、その後のいろいろな葛藤の中から生

まれたのだ、とも思いました。

そうして、この絵本を眺めているうち、これはまったくの

私事ですが、私は、或叔父のことを思い出しました。

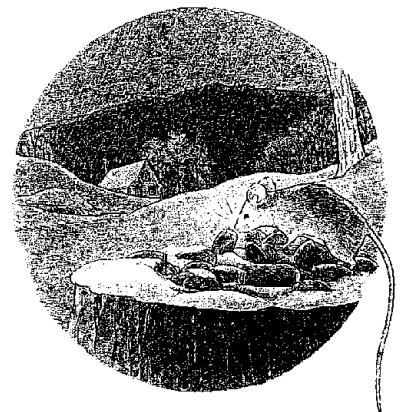
それを、澄川さんに出した礼状の中から抜いて話しますと、

私には、シベリアに抑留され、終戦後、五、六年たって生

還ってきた母方の叔父がいます。

シベリアでの話はあまり語りたがりませんでしたが大変

な経験をしたのだと思います。六十一歳で亡くなるまで、当



り前の生活ができません。世俗のことが鬱陶しくなるのか、自分で造った山奥の小屋に出掛け、十日ほどそこで暮します。そして帰って来ると、「山からの土産」と言っ
て、山菜や茸や木の葉などを届けてくれました。

或時、一升ほど、立派な栗の実を持って来たことが
あります。そして、

「地ねすみの菓を掘ると、冬の蓄えにたね。土の中に木の葉が蔵^{かく}されてある。地ねすみには気の毒なことをしたけれど、皆、虫のついていない見事なものばかりなんだ」と話していました。

私は、絵本が届いた日の四日前、「北銀ふるさと大学」に呼ばれ、岩手町、沼宮内に行って話をしてきました。行つたついで、齋寿姫伝説で有名な大安良神社に立ち寄り、その境内で栗の実を拾っていたお婆さんと親しくなりました。その時、栗の実にふれ、その叔父の話をお婆さんに語っていたのです。

十六日に届いた澄川さんの絵本は、野ねすみが運んできたどんぐりの話でした。何だか因縁めいたものをそこに感じました。そんなこともあってか、「どんぐりみりつけた」は、印象深く残りました。



森からの特別な贈り物

澄川嘉彦



秋の終わりになると東北の山里には強い西風が吹き始める。それは風というより、風のかたまり。がぶつかってくるような激しさで、私たちが家族が暮らす丸太小屋もみししとゆれる。今から十年以上前、私は若手の開拓地に住むあるお婆さんのことを映画にしたいと考え、撮影のために山奥の丸太小屋に移り住んだ。「映画をつくる」と意気込んで会社を辞めたもののカメラや資金のあてはまったくなかった。山には冬の気配が迫ってきており、初めて経験する寒さに自分の無謀な選択を後悔していた。

そんなある日、用事でしばらく家を留守にしたときのことである。掃って来て布団を広げると、ちょうど折り目のところに何かがキラキラと光っている。驚いてよく見ると、どんぐりだった。お茶碗に一杯分ぐらいの量で、手にとってみると虫食いの穴がひとつもなく、まるで誰かが磨いたようなつやがある。私はどんぐりを手に握ぐんでいたように思う。そんなことがあるはずもないのだが、どんぐりが森の神様から自分への特別な贈り物に感じられたのだ。山奥に来てすぐに弱音をはいている人間をみかねた神様からの贈り物である。ひとつひとつ丁寧

にみがいたような輝きが「あきらめるな、あきらめるな」と励ましてくれていた。翌年、東京に残っていた家族が引越してきて、幼い子どもたちが名探偵よろしく、どんぐりの運び屋をつきとめた。運び屋さんは、寒くなると丸太小屋で冬を越そうとやって来る野ねすみたちであった。

この絵本は、妻や三人の子どもたちとすごした山での日々から生まれた。大庭さんがあたたかな筆づかいで、私たちと森の仲間がふれあつた不思議な時間を絵にしてくださいました。今でも秋になると、子どもたちとどんぐりをひろって歩く。しかし、あのときに野ねすみがプレゼントしてくれたような輝きをもつどんぐりはなかなか見つからないのである。



澄川嘉彦



大庭英哉



夜の間

一九六三年、広島県生まれ。映画監督。八八年、東京大学文学部卒業。NHKに入社。九九年に退社して岩手県川井村「寛政古市」タイマグラ地区に移り住みドキュメンタリー映画の制作を開始。監督作に「タイマグラばあちゃん」「犬を家へタイムグラの森の子どもたち」がある。岩手県在住。

一九七〇年、神奈川県生まれ。主に児童書の挿絵画家として活動している。挿絵を担当した作品に「シノダ」シリーズ（徳田社）や「ティーン・パワー」よろしくシリーズ（講談社）などがある。漫画作品集として、「トモエ」（宙出版）「郵便配達と夜の国」（青土社）がある。神奈川県在住。